

英国におけるバイリンガル教育

——バイリンガル助手の観点から——

上 條 雅 子

はじめに

英国では公用語に英語が使用されているが、英国は多民族多文化であるために 4 つの地域（イングランド、ウェルズ、スコットランド、北アイルランド）では、多様なことばが使用されている。これらの居住地域および家庭で異なることばを使用している子供達の言語は、外国語教育あるいはバイリンガル教育として学校等で実施されている。この論文ではバイリンガル指導におけるバイリンガル助手の現状とその背景として 4 つの地域におけるバイリンガル教育の歴史的背景を考察し、英国特有のバイリンガル助手の役目と問題点を指摘すると共に、英国における現代語教育の目的との関連に言及する。

まず、英国の学校におけるバイリンガル助手に関して、多様な 2 言語、バイリンガル指導担当者と異なる名称と役目を果たすバイリンガル助手の種類並びにバイリンガル指導について考察する。次に、英国における現代語教育あるいはバイリンガル教育の歴史的背景に関して、英国全域に共通するバイリンガリズムの社会言語・文化の状況および上記 4 地域における地域特有のバイリンガリズムの歴史について考察する。

I 英国の学校におけるバイリンガル助手

1. バイリンガル (bilingual)

2 言語を日常に使用して母語話者 (mother tongue・native speaker) のように流暢に書き、話すことができること、あるいはできる人をバイリンガルと

いう。バイリンガル 2 言語 (Duel languages, DL) は、母語 (mother tongues) である第一言語 (L1) と第二言語 (L2) である。

英国において、通常 L1 は英語である。DL は例えば、ウエルズにおけるウエルズ語と英語 (Welsh-English), アイルランドにおけるアイルランド語と英語 ((Irish-English), スコットランドにおけるゲール語と英語 (Gaelic-English), 移民としてのマイノリティの母語と英語 (minority mother tongues-English) である。以上のケースで英語は通常 ESL (第二言語としての英語) である。

英国短期滞在の外国人の場合、DL は彼等の母語と ESL としての英語であることが多い。英語が母語である英国人 (native speaker) の L2 は通常、現代語 (modern language)・現代外国語 (modern foreign language) で、外国語の学習数により第一外国語 (FL1) さらに第二外国語 (FL2) と呼ばれる。

2. バイリンガル指導担当教員

バイリンガル・スクールあるいはバイリンガル・クラスでバイリンガル教員あるいは 2 言語習得の補助・助言をする人々を、広義に bilingual assistants (バイリンガル助手) という。英国において、バイリンガル学習者のバイリンガル指導を担当するのは、バイリンガル教員であるが、この他に英語を第二言語として教える専門家である ESL 英語教員 (ESL teachers), 英語を母語として教える専門家である英語教員 (English teachers) あるいは担任教師 (class teachers) も関与する。さらに、全ての一般教員も、バイリンガル指導に関与することが期待されている。バイリンガル指導担当教員は通常バイリンガル助手とチームを組んでバイリンガル指導を行い、チーム・ティチャーとも呼ばれる。

3. バイリンガル助手 (Bilingual assistants)

バイリンガル助手と呼べる人々は次のように多様である。言語助手あるいは母語補助教員 (Language Aides or mother tongue support teachers), バイリンガル学習者の言語習得およびその他の問題の専門家である専門職補助員 (paraprofessionals) として、スピーチ・セラピスト (speech therapists), スピーチ・セラピー補助員 (speech therapy aides), バイリンガル・スピーチ・セラピー補助員 (bilingual Speech therapy aides), 二言語セラピー助手 (DL; dual language therapy aides), コミュニケーション助手 (communication

aides), アドバイザー専門家 (specialist advisers), コンサルタント (consultants teachers), カウンセラー (counselors), さらに, 通訳者 (interpreters), バイリンガル学習者の親, 少数民族地域の住民, バイリンガルの大学生などボランティアの人々 (volunteers) である。

多民族多文化の英国におけるバイリンガリズム (2 言語使用) の状況は, 地域的, 政治的, 言語的, 文化的, 歴史的, 教育的に多様であり, バイリンガル助手はバイリンガル担当者およびバイリンガル学習者のバイリンガル習得を, 多種多様な方法で補助している。

バイリンガル指導はウエルズ, アイルランド並びにスコットランドでは, 一般にバイリンガル・スクールで行われている。特にウエルズでは, DL の子供達のウエルズ語に英語の影響が多大であり, ウエルズ語の矯正が不可欠であることから, バイリンガル・スピーチ・セラピー補助員が重要視されている。イングランドのステート・スクールにおいては, バイリンガル指導はバイリンガル・クラスあるいは教科科目として対応している。イングランドの DL の子供達は他民族・多文化であることから, バイリンガル指導担当者を補助する人は, 言語助手あるいは母語補助教員と呼ばれている。

1) 言語助手・母語補助教員

1977 年に ILEA (ロンドン教育当局) のバイリンガル教育プロジェクトにより, マイノリティの母語はマイノリティの父母が設立した有志学校 (voluntary schools) あるいは補習校 (supplemental school), コミュニティ・母語クラス (community-based mother tongue classes), 学校の施設を借用したパートナーシップ母語クラス (partnership mother tongue classes) などで教えられている。1975 年に, コミュニティ・母語クラスは 117 クラスあった。これらの学校では, それぞれイタリア語, ポーランド語, ギリシャ語, 中国語, スペイン語, ヘブライ語, 南アジア語 (South Asian Muslims' religious language, アラビア語) などが教えられている (Abudarham, pp.145~146)。

1980 年代に地方教育当局 (Local Language Authority, 略して LEA) はマイノリティの母語 (minority mother tongues) を中等学校のカリキュラムに導入し, 言語助手あるいは母語補助教員を巡回教員 (peripatetic teachers) として中等学校に派遣し始め, 彼等の教員数は増加した。幼児学校と小学校 (Infant and primary schools) においても, LEA は幼児学校と小学校におけるマイノリティの子供の母語を発展させて, 英語を習得させるべきであるとの

改正方針が、1981 年の内政委員会報告 (Home Affairs Committee's Report) に示された (Abudarham, p. 147)。

2) バイリンガル・スピーチ・セラピー補助員

2 言語 (DL) に問題のある子供と大人のクリニック受診者 (client) のスピーチ (speech), 音声 (voice), 言語 (language), 流暢さ (fluency) の障害, コミュニケーションの困難を適切に療法する専門教育有資格で, 訓練された専門職補助員 (Paraprofessional teachers) として, スピーチセラピー補助者 (speech therapist) とコミュニケーション補助員 (communication aides) を, 専門職補助員の多様な背景と役目により, バイリンガル・スピーチ・セラピー補助者 (bilingual speech therapy aids) と呼ぶ (Abudarham, p.161)。コミュニケーション補助員は, DL の子供達の言語などを療法するスピーチ・セラピストを補足する。スピーチセラピストとコミュニケーション補助員は相互補完の関係である。

3) スピーチ・セラピスト (speech therapist)

DL (ウエルズ語－英語バイリンガル) の子供達のウエルズ語が正常でない子供達は患者 (patients・clients) と表現されている。これら患者のウエルズ語を矯正する人々はスピーチ・セラピスト (speech therapist) として知られている (下記, 言語問題とスピーチ・セラピスト参照)。

DL 学習者の受診者が住んでいる社会で, できるだけ一人でコミュニケーションができるように手助けすることがスピーチ・セラピストの目的である。これに対して, ESL 教員は普通の学校教育で DL 学習者が有利になるために, 言語を教える。第二言語 (SL) の学習に問題のある子供たちは, ESL 教師に任せるか, または学校のバイリンガルプログラムに任せるべきであるのがよい, とされている。スピーチ・セラピストの役目は SL を教えることではなく, 子供たちが言語と非言語 (verbal and or non-verbal) によるコミュニケーションの方法の進展を助けることである。もし言語であれば, 子供たちが彼らのニーズと欲求を伝えることができ, 住んでいる世界についてもっとよく知ることができるための第一言語, 第二言語, または二つの言語の混合を取り扱う (Abudarham, 153)。

スピーチ・セラピストは DL の子供たちの家庭訪問, クリニックにおけるインタビューおよび必要であれば学校訪問をして, 家庭の言語・文化事

情とこの状況に置かれた子供たちの言語・文化の状況を把握して、まず、個々のケースの経歴を作成する。この経歴を基に、スピーチセラピー補助員は彼らの文化的・精神的面を考慮しながら、子供たちの言語と非言語の矯正を行う。

第二言語 (SL) 指導原則として、DL 学習者個人の経過事例記録、インタビュー、家庭訪問や週一回のクリニック受診では不十分である。クリニックに基づく療法は家庭や学校にも拡張されるべきである。訓練された通訳がない場合には、SL を話す家族のメンバーに言語矯正の方法と目的を説明することが必要である。

管理プログラム (Management programme) では、他の文化圏からの DL の子供たちの正確な知識の詳細が必要であるために、対象とする言語の受診者の感情的、認知的、言語的、教育的、社会的、文化的なニーズと背景が考慮されなければならない。スピーチ・セラピストは、これらの知識を心理学 (正常・異常)、医学、教育学、音声学、言語学、社会学など他の専門分野から引き出す。スピーチ・セラピストを効果的に訓練するためには、適切なレベルのチューター経験が必要である。

バイリンガル教員助手はアメリカでは DL の矯正にも従事するが、英国ではこの役目は一般にスピーチ・セラピー補助員 (speech therapy aides) が行う (Abudarham, p.161)。

4) 通訳者 (interpreter)

通訳者は DL (二言語) の子供の第一言語 (L1)、すなわち母語の問題に関して補助する。外国人の子供の学習障害と第二言語 (ESL) の学習成果の適切なテストの訓練、テストに先立つ家庭訪問による家庭言語の状況、セラピストのクリニックや病院における DL の子供への質問、返答、事例などを通訳する。通訳者は通訳の役目の他に、複雑な問題も処理する。例えば、DL の子供のケースについて最終的責任があるセラピストの指示と監督の下で働き、DL の子供の療法の進歩とその結果に影響を与える言語と社会文化の要因について、スピーチ・セラピストに助言をする。

通訳者は二言語運用有資格者あるいは少なくとも二言語運用能力のある大学生などである。通訳者の訓練は、これらの大学生を訓練するために使用する。ボランティアの通訳に基づく制度は長期的に存続できない。英国では通訳の公的訓練と職業としての報酬は、まだ国家政策として出発していない。

通訳者がスピーチ・セラピストと緊密な関係で働き、経験的訓練を受けるケースはある。DL の子供達を彼らの母語で教える教員養成規定は、アメリカより英国のほうがより進んでいるように思える。

アメリカではバイリンガル助手が DL の子供の言語の矯正を手助けすることも要求されている。英国では、スピーチ・クリニックにスピーチ・セラピスト補助員が雇用されており、バイリンガル助手 (DL aides) は普及していない。アメリカにおいて、通訳はスピーチ・クリニックよりも学校や病院に頻繁に訪れる。

DL 指導において、子供の DL に関する知識のある専門職補助員 (Paraprofessionals) の使用、スピーチ・クリニックにおける通訳者の使用、スピーチ・セラピストとして通訳者を使用することは適切であるという (Abudarham, p. 81)。

4. バイリンガル指導

一般にバイリンガル指導担当者とバイリンガル助手はチーム・ワーク (team-work) を組んでバイリンガル指導をする。言語助手あるいは母語補助教員は担任教師とチーム・ワークで主としてマイノリティの母語指導を行ない、ESL 教員は担任教師とチーム・ワークで彼等の第二言語としての英語指導を行う。バイリンガル専門家、すなわち教員やスピーチ・セラピストなどの専門職補助員は頻繁に呼ばれて、子供や大人の第二言語に現われた好ましくない影響に助言を与える (Abudarham, p. 2)。

英国短期滞在の外国人の場合、EFL としての英語を担任の補助として英語教員 (English teachers) が LEA から派遣されることが多い。学習者の英語のレベルが非常に低い場合には、学習者は授業時間にランゲージ・センターに行って英語を学ぶ。学習者の母国語はそれぞれの国の補習校があれば、そこで授業時間外に学ぶ。英語が母語である英国人 (native speaker) は、主としてフランス語やドイツ語などヨーロッパ主流の現代外国語を学校の授業で科目として学ぶが、母語外国語助手 (mother tongue foreign language assistants) の使用が奨励されている。他方、現代外国語を補習として言語学校で学ぶ学習者もいる。

バイリンガル・スピーチセラピー補助員は、主として DL の子供達の言語矯正を行う。通訳者は DL の子供達とバイリンガル指導担当者他とのコミュニケーションにおいて重要視されている。

言語助手あるいは母語補助教員である巡回教員 (peripatetic teachers), コンサルタント (consultants teachers), カウンセラー (counselors) は移民の学習者のみでなく, 一般の母語話手 (native speakers) の言語である英語, その他の問題を補助する (Abudarham, p. 119)。

今後, 二言語矯正助手 (DL, dual language therapy aides) や DL の子供達の第一言語の通訳者 (interpreter) が, 専門職助手教員 (Paraprofessional teachers) として, 訓練される必要がある (Abudarham, p. 81)。

II 英国におけるバイリンガリズムの背景

1. バイリンガリズムの社会言語・文化の状況

英国における少数民族集団 (minority ethnic groups) の言語的・文化的多様性は, ウェルズ, アイルランド, スコットランド, イングランドにおいて類似している。英国における全ての DL の子供達が非英国人 (non-Anglo) ではない。ウェルズ人の DL の子供たちは, 英国人と類似の社会・文化の価値観を共有する。少数民族地域の DL の子供たちの多くは英国の教育制度で教育され, 同様の価値観を共有している。移民の 2 世の子供たち (Second-generation Immigrant children) は 1 世 (first-generation peers) より西洋式生活により精通しているが, それでも彼らの家庭や地域の文化的価値観の影響を受ける。大人でも両親の文化に反抗し, 英国文化 (host-culture) に傾く。宗教も重要な要因となる。

英国におけるそれぞれの少数民族集団の言語・社会・文化の特徴の詳細について説明するのは不可能である。英国には約 50 の少数民族集団があり, 少なくとも 150 の言語と多数の方言が存在する。1983 年にロンドンでは 147 の方言が存在した (Abudarham, p.158)。

これらの情報に加えて, DL の子供たち個々の経過事例, インタビュー, 適切な文化的考慮, カウンセリング, 個々のクリニック的観察など, 彼らが直接関与する環境を知る事はバイリンガル助手にとって有益である。

バイリンガリズム: ケルト語・ケルト人地域 (Celtic countries) であるウェルズ, アイルランド, スコットランドにおけるバイリンガリズム (二言語併用; bilingualism) は, 主として先住民マイノリティの言語の擁護 (保護)

と回復に関係している。しかしながら、イングランドにおけるバイリンガリズムは家庭、テンプル、モスク、教会あるいは任意教育において彼等の母語を維持する多数の民族に言及される (Baker, p.59)。

ウエルズ、アイルランド、スコットランドにおいてバイリンガル教育は実施されているが、多数の住民は、多分言語を文化遺産として特徴づけることに対して反対というよりは無関心である。イングランドでは、バイリンガリズムとバイリンガル教育に対してより反抗的、偏見、そして疑いの目で見ている。これは部分的に英語が優勢言語であるとみなす 19 世紀の帝国主義と植民地主義見解に由来している。イングランドにおけるマイノリティの教育に対する態度は、同化政策 (assimilationist) であり、マイノリティの言語から英語への移行政策 (transitionalist) である。移民に対する政府の英語のパンフレット (文部省, 1963) によると、学校で英語を話さない子供たちがいるために授業がじゃまされているという理由で、1950 年以來の言語多様の増加に対する対応は、ESL 教育規定の増加であった (Baker, p.60)。バイリンガルの政策と方針、規定と実践はより多言語・多文化政策に動いている傾向があるとの見方もある。しかし、一般国民のイングランドにおけるマイノリティの言語に対する拒否と反感は潜在しており、多数の白人のバイリンガル教育に対する見解は依然としては同化政策であり、バイリンガル教育には反対のようである。

2. 4 地域におけるバイリンガリズム

1) イングランド

イングランドのマイノリティの言語には、Arabic, Bengali, Cantonese, Gujarati, Greek, Hindi, Italian, Punjabi, Polish, Portuguese, Spanish, Turkish, Ukrainian and Urdu などの言語が含まれる (Baker, p.59)。これらの言語のバイリンガリズムは、学校、仕事、宗教関係、文化、マスメディアに現存している。

スワン報告 (Swann Report, 1985) に、本質的にバイリンガル教育は拒否されているが、マイノリティの言語に関する 3 つの異なる可能な方針がに述べられている。第一の方針は、バイリンガル教育は母語を指導言語として使用する。母語維持はマイノリティの生徒自身の言語を流暢に使用できるように習得するものとみなす。母語指導は、例えばフランス語やドイツ語が中等

学校で指導されるように、現代語のカリキュラムの一環としてマイノリティのコミュニティ言語を指導するものとみる。第二の方針は、バイリンガル教育は、有益であるよりも不利益であるケースが多いという理由で拒否されている。母語維持は学校の方針ではないとする。英語を指導言語とする学校 (**mainstream schools**) では、民族の言語を教えるコミュニティの役割を肩代わりすることは期待されていない。第三の方針として、民族の言語は一般教育のカリキュラムの中で占める割り合いが減少しており、母語指導の進展結果は悪いように見受けられる。従って、民族の言語はカリキュラムの指導言語としてではなく、カリキュラムの科目として指導するのがよいとする。彼らにとって母語 (**home language**) であるにも拘わらず、母語はカリキュラムの中で外国語と同類とみなすべきである。

要するに、マイノリティの言語は育成され、奨励されるべきであるが、普通教育のカリキュラムに通常の方法で含めるべきではない。マイノリティの言語育成は、マイノリティのコミュニティに学校の施設および英語が流暢に話せない生徒を援助するために、小学校のクラスのバイリンガル資料の使用を許可する、というものである (**Baker, p.63**)。スワン報告は中間的、伝統的イギリス人の妥協を現出している。

2) ウェルズ

ウェルズにおけるバイリンガリズムは、ウェルズ・英語のみに限定されているわけではない。他の言語のバイリンガリズムも存在する。19 世紀後半には公教育では英語が指導言語であった。19 世紀初期までに、幾つかの小学校低学年 (**infants' schools**) でウェルズ語が使われ、小学校高学年 (**junior**) と中等学校でウェルズ語が科目として少し教えられていた。次第に幾つかの小学校高学年でウェルズ語が指導言語となり、同時にウェルズ語を第二言語として教える必要があるという認識が高まってきた。バイリンガル教育は拡張され、改良され、1939 年、最初のウェルズ語学校が開校し、公的に小学校レベルでウェルズ語による指導語が始まった。ウェルズ語学校では、英語を話す親の子供たちは時々運動場で英語を話すこともあった。これはウェルズのバイリンガルにおいて、親の言語が教育現場に現れることを示している。

学校の種類

ウエルズ教育当局のウエルズ語に対する方針は異なる。11 才以下の子供の学校教育の種類には下記の学校がある (Abudarham, p. 39)。

Welsh-medium schools : 当初は学校外の環境における英語の影響に依存して、その後 7 歳頃に英語を第二言語として導入し、11 歳までにバイリンガルを達成させることを目的とする有志学校である。

Bilingual schools : ウエルズ語と英語の両方の指導言語により、早期に 2 言語使用を促進する。

English-medium schools : 英語を指導言語とする学校であるが、時折、ウエルズ語により授業を行ったり、ウエルズ語を科目として教えるが、バイリンガリズムは学校のシステムとして重要視されていない。

Welsh-medium stream : 上記の英語を指導言語とする学校内で、英語を指導言語とするコースに平行して、ウエルズ語を指導言語とするコースである。

Bilingual units attached to English-medium schools : 英語を指導言語とする学校付属バイリンガル単科コースである。

Welsh medium Nursery schools and Playgroups : ウエルズ語指導保育園・プレイグループ協会の運動として、就学前の子供達にすべてのレベルで、ウエルズ語による指導言語を通してウエルズ語を習得する機会を与えることを目的とする。

言語問題とスピーチ・セラピスト

ウエルズにおいて、ウエルズ語への英語の影響は多大である (Abudarham, p.40)。ウエルズ語と英語のバイリンガリズムに生じるこの現象は、借用 (borrowing), 重合・干渉 (interference), スイッチ (switching) である。

借用に関して、例えば、多様な英語の音素 (phonemes) がウエルズ語に借用される、あるいは英語の語彙がウエルズ語に借用されて混合する。このケースは最も一般に生じている。2 言語併用の場合に、一方の言語に特有な特徴が他方の言語の発話に際して重なり合ってあらわれることを重合・干渉という。例えば、幾つかのウエルズ語の語源が維持され、この間に他のウエルズ語にはウエルズ語の音素が入り、ウエルズ語が修正される。ウエルズ語と英語の多様な混合により、ウエルズ語の語形が多様に変化する。さらに、借

用訳 (loan translation) や意味の変化 (semantic change) が生じる。ウエルズ語－英語バイリンガリズムにおいて、文章中にウエルズ語と英語が複合語として交互に構成され発話されることをスイッチという。このケースは年令の低いバイリンガルの子供達に著しく起る。英語のみを話す子供達はウエルズ語学校において、ウエルズ語の習得にほとんど問題はない。

上記に述べたように、ウエルズ語への英語の影響によってウエルズ語の習得が妨げられる問題が多々であることから、ウエルズにおいてスピーチ・セラピストがウエルズ語の習得に問題のある患者 (patients・clients) である子供達を援助する。バイリンガリズム (二言語併用, bilingualism) の歴史的・社会的・教育的・地理的諸相によって、ウエルズ・英語バイリンガルにおけるスピーチ・セラピー規定 (speech therapy provision) が制定された (Abudarham, p. 35)。

ウエルズにおいて、1987 年現在 100 人以上の常勤と非常勤のスピーチ・セラピストがいる (Abudarham, p. 42)。このうち、ウエルズ語が第一言語である人々とウエルズ語を第二言語として習得したものを含み、22 人がウエルズ語を話す。全セラピストの半数以上がウエルズ語を話す必要のある地域 (Dyfed, Gwynedd) で働いている。1 言語しか話せないスピーチ・セラピスト (monolingual speech therapist) が DL の患者のウエルズ語を矯正するのは大変難しい。

ともあれ、スピーチ・セラピストにとって、どの地域で仕事に従事しようと問題は多様で複雑である。ウエルズ語のスピーチと言語の発展を評価する標準テストはなく、患者のバイリンガル環境、バイリンガリズムのレベル、親の子供の言語習得に対する期待なども多様に異なる。

3) アイルランド

アイルランドのケルト人 (Gaeltacht: Irish-speaking) 地域では、140 年ほど前までは、すべてのコミュニケーションがアイルランド語で行われており、英語を理解できる大人はほとんど皆無であった。しかし、教育政策により、この地域の公立学校 (national schools) における言語、教科書、指導言語などは、すべて英語であった (Baker, p. 48)。1878 年に、アイルランド語保存協会 (Society for the Preservation of the Irish Language) の助力により、アイルランド語 (Irish) を学校教育の授業時間外に課外教科として導入することが許された。1884 年、公衆のアイルランド語に対する関心が高まった結果、

小学校におけるアイルランド語の養成のための手段が講じられた。

19 世紀にアイルランド語から英語への教育政策の変更により、アイルランドの国家としての伝統、音楽、歴史、地理に関するアイルランドの文化の知識は最低限度に抑制された。アイルランドの言語と文化を維持すべく、ケルト人連盟 (Gaelic League) はアイルランド語 (Irish) を適切な授業科目としてのみならず、アイルランド語が家庭言語 (home language) である子供にはアイルランド語を指導言語として学校教育に導入する運動を行った結果、1904 年に、バイリンガル・プログラム (Irish-English) シラバスが小学校に導入された (Baker, p. 49)。1900 年から 1921 年の間に、アイルランド語を指導言語とする学校が 100 校から 2000 校へと劇的に増加した。アイルランドが自由国となった 1921 年には、4 分の 1 の公立学校でアイルランド語が教えられ、アイルランド語を指導言語とする学校は 240 校であった (Baker, p. 49)。

1940 年代にはすべての学校でアイルランド語が教えられ、アイルランド語を指導言語とする学校は小学校で 12%、中等学校で 28% であった。後者における増加は、アイルランド語が大学受験科目であったことにもよるであろう。

1941 年アイルランド公立学校教員組合 (Irish National Teachers Organization) の報告によると、多くの父兄が英語による授業とアイルランド語で書くことを拒否する、あるいは英語が十分に発達するまで延期することを要求した。平等、科学、主なヨーロッパの現代語、実用的科目、現代カリキュラムの重要性を挙げて、学校におけるアイルランド語学習の義務に対する反対運動が起った。1975 年、多くの父兄はアイルランド語の授業方法に不満を持ち、アイルランド語学習の義務化に反対した (CILAR, Committee on Irish Language Attitude Research)。それはアイルランド語で教えられるので試験に落第しているという理由であった。1960 年に 420 校あったアイルランド語小学校は、1979 年には 160 校に減少し、このうちケルト人 (Gaeltacht: Irish-speaking) 地域における学校は 23 校であった。同様の現象が中等学校レベルでも起った。

最近、バイリンガル・スクール運動が再起していることが示されている。学校のタイプには英語によって指導が行われる学校 (English medium schools)、アイルランド語によって指導が行われる学校 (Irish immersion schools)、公用語としてのアイルランド語を話す地域の学校 (schools in the

official Gaeltacht; Irish speaking) がある。義務化は拒否になりやすい。アイルランド語で指導されるからといってアイルランド人にはならない (Baker, p. 50)。

4) スコットランド

20 世紀初期にスコットランドの人口の 5% (250,000 人) がゲール語 (Gaelic) を話していた。1872 年スコットランド教育令にはゲール語に関する条項はなく、学校でゲール語を認めなかった。学校では英語による指導言語を行い、ゲール語への否定的な態度を示し、ゲール文化の代わりにイギリス歴史を導入し、イギリス文化への同化を実施して、学校制度はゲール語の衰退の主たる代行機関となった。

1950 年以降、マイノリティの中で 4 つの異なる方法で、ゲール語に関する関心と考察がなされた。その 1 は、圧力団体によるバイリンガル教育の必要性を表明したことである。例えば、ゲール語を話す地域に完全なバイリンガル教育を実施することや、スコットランドの大人と子供にゲール語を学ぶ機会を与えることなどである。

その 2 は、アイルランドやウエルズにおける運動に類似しているが、親が有志でゲール語就学前プレイグループ (Gaelic pre-school playgroups) を開始したことである。これを基に、特定の地域におけるすべての中等学校で、ゲール語を学習することができる可能性があることが推察された。

その 3 は、1975 年以来バイリンガル教育プロジェクトによって、ゲール語を西諸島 (Western Isles) におけるすべての普通教育の小学校で使用するようになったことである (Baker, p.58)。1982 年、西諸島当局 (Western Isles Authority) がこのプロジェクトを引き継ぎ、ゲール語は教育制度の中にしっかりと根付いた。

その 4 は、スコットランドの中央地域 (mainland) にゲール語－英語バイリンガル・スクールの設立が実現可能であるということが、調査により判明したことである。学校で子供達がゲール語を学習できることに対する親の興味は増加した。ゲール語を話さない親は子供達が文化遺産とそのルーツを知りたいことを希望し、あるいはゲール語と英語の両方の言語を習得することは、言語学習と教育一般にとって有益であると信じた。親は失われた歴史的遺産の回復を願い、ゲール語を学習する子供達にゲール語を習得して欲しいと願っている (Baker, p.58)。

ケルト語の使用（1981 年現在）は、ウエルズで人口の 19%，アイルランドで 31.6%，スコットランドで 1.6% (Gaelic) であり、スコットランドにおけるゲール語使用が一番少ない。南アイルランドで 800,000 の人々がゲール語 (Gaelic) を話しているが、北アイルランドでもマイノリティはアイルランド語 (Irish) を話している。ウエルズでは 500,000 に近い人々がウエルズ語を話している (Baker, p.59)。スコットランドではゲール語 (Gaelic) を話す人々はわずか 80,000 人である。アイルランドとウエルズでは、ケルト語を母語 (native speakers) とする人々と 1 つの言語しか話さない人々 (monoglots) の間で、少数の人々の運動ではあるがケルト語維持に対する関心が芽生えている。バイリンガル教育は言語の回復という観点から、中央と同じように地方にも出現している。

英国の 4 つの地域（イングランド、ウエルズ、アイルランド、スコットランド）に、バイリンガル教育を促進し、設置する草の根運動があった。この運動は、3 つのケルト語・ケルト人地域（ウエルズ、アイルランド、スコットランド）における就学前プレイグループおよびケルト語を学ぶ成人クラス、親の奮闘による 4 つのすべての地域におけるバイリンガル規定、イングランドにおける有志によるマイノリティ言語クラスなどの導入に寄与した。最近のバイリンガル・クラス、バイリンガル単科クラス (units) 並びにバイリンガル・スクールの発展に影響を与えたのは、行政関係者、政治家、教育者よりも、圧力団体、コミュニティ・グループならびに言語活動のほうが多である (Baker, p. 78)。

教育行政・政策の観点から、1988 年教育令はイングランドとウエルズのみならずアイルランドとスコットランドにおけるバイリンガル教育の促進およびバイリンガル助手の使用に影響を与えている。英国のバイリンガル助手の多様さと問題は、英国におけるマイノリティの言語と文化の複雑多様さによる。

おわりに

英国におけるバイリンガルは次のように多様である。第一言語 (L1) は母語である英国人の英語である。バイリンガル 2 言語 (DL) はウエルズ語と英語、アイルランド語と英語、スコットランドにおけるゲール語と英語、移民としてのマイノリティの母語と英語 (minority mother tongues-English) であ

る。以上のケースで英語は通常 ESL（第二言語としての英語）であるが、英国短期滞在の外国人の場合、DL は彼等の母語と EFL としての英語である。英語が母語である英国人の L2 は現代外国語 (FL1, FL2・・・) である。

バイリンガル指導に関与する担当者もバイリンガル助手も多様である。前者にはバイリンガル教員, ESL 英語教員, 母語英語教員, 担任教員, 一般教員, 後者には言語助手・母語補助教員, バイリンガル・スピーチ・セラピー補助員, スピーチ・セラピスト, 二言語セラピー助手, コミュニケーション助手, アドバイザー専門家, コンサルタント, カウンセラー, 更に通訳者, ボランティアの人々 (バイリンガル学習者の親, 少数民族地域の住民, バイリンガルの大学生など) も関与する。

英国におけるバイリンガリズム (2 言語使用) の状況が多様で, 言語数も多いために, 4 地域におけるバイリンガル指導の学校も公立, コミュニティ, 有志学校あるいはバイリンガル・スクール, バイリンガル学級等地域によって異なり, バイリンガル助手はバイリンガル担当者およびバイリンガル学習者のバイリンガル習得を, 多種多様な方法で補助している。

マイノリティの母語教育は教育当局によって奨励されている。1977 年の ILEA (ロンドン教育当局) バイリンガル教育プロジェクトによる母語補習学校等の設立, 1980 年代に LEA (地方教育当局) による中等学校カリキュラムへの母語導入と中等学校への母語補助巡回教員の派遣, 1981 年の内政委員会報告による改正方針 (LEA は幼児学校と小学校におけるマイノリティの子供の母語を発展させて英語習得を促進すること) である。

英国には約 50 の少数民族集団があり, 150 以上の言語と多数の方言が存在し, 1983 年にロンドンでは 147 の方言が存在したが, 少数民族集団の言語的・文化的多様性は 4 地域において類似している。しかし, ケルト語・ケルト人地域であるウェルズ, アイルランド, スコットランドとイングランドにおけるバイリンガリズム (二言語併用) と異なる。前者は先住民マイノリティの言語の擁護 (保護) と回復を目的としてバイリンガル教育が実施されているが, 多数の住民はその目的に関心である。バイリンガルの政策と方針, 規定と実践は 2 言語・2 文化政策に動いているようである。後者は多数の少数民族が家庭, テンプル, モスク, 教会あるいは任意教育において彼等の多数が母語の維持を目的としているが, 多数の白人はバイリンガリズムとバイリンガル教育に対して偏見を持ち拒否的であり, 同化政策あるいはマイノリティの言語から英語への移行政策の態度を示している。

英国は多民族・多文化であり、3 地域（ウェルズ、スコットランド、北アイルランド）における 2 言語使用は各地域で異なるが、イングランドの場合には多言語が使用されているという複雑な言語事情がある。3 地域では地域住民の 2 言語政策がバイリンガル教育により実施されているが、イングランドでは移民である少数民族の言語の維持による英語習得という移行政策・同化政策がとられている。言語事情および理論と実践における言語政策は米国など他の多民族国家と異なり英国特有である。従って、バイリンガル助手は多様なケースに対処するために、ケースによって異なる助手が学習者に対応しており、特にセラピストの役目が多大である。

英国におけるバイリンガル教育と現代外国語教育目的との関連についてまとめてみる。多民族国家のバイリンガル政策として、例えば米国においてはバイリンガル教育法（1976 年）によってバイリンガル教育が実施されている。しかし、英国におけるバイリンガル教育はナショナル・カリキュラムの導入（1988 年）により、現代外国語が中等学校で必修となり、少数民族の言語は現代外国語科目として単独に学習しまたはバイリンガル（英語・母語）教育として実施されている。現代外国語教育は英国の経済政策に寄与することを目的としているので、外国語教育がバイリンガル教育より優先されるが、外国語としての少数民族の言語の中で、生徒は従来通りフランス語・ドイツ語・スペイン語の順で履修しており、学校で少数民族の言語科目を導入することは困難な状況にある。従って、現代外国語は実践として地域的・移民の言語偏重で英国人の外国語（フランス語・ドイツ語・スペイン語）が優先的であり、バイリンガル教育は 3 地域の言語が優先されており、現代外国語教育の目的はその促進と成果において、多大な効果はまだ期待できないと思われる。

【参考文献】

- Abudarham, Samuel (ed.). *Bilingualism and the Bilingual; An Interdisciplinary Approach to Pedagogical and Remedial Issues*, Nfer-Nelson, Berkshire, 1987.
- Anderson, Theodore and Boyer, Mildred. *Bilingual Schooling In United States*, Volume One, Southwest Educational Development Laboratory, Texas, 1970.
- Baker, Colin. *Key Issues in Bilingualism and Bilingual Education*, Multilingual Matters LTD, England, 1988.
- Baker, Colin. *Foundation of Bilingual and Bilingualism*, Clevedon: Multilingual

- Matters, 1993, translated and published, Taishusha, Japan, 1996.
- Cohen, Andrew, D. *A Sociolinguistic Approach to Bilingual Education*, Newbury House, Massachusetts, 1975.
- Lewis, E. Glyn. *Bilingualism and Bilingual Education*, Pergamon Press, 1981.
- Lynch, James. *The Multicultural Curriculum*, Batsford Academic and Educational Ltd., London, 1983.
- Padilla, Raymond V. (ed.) *Ethnoperspectives in Bilingual Education Research: Volume III, Bilingual Education Technology*, Eastern Michigan University, 1981.